

「汚辱に塗れた人々の生」をめぐって

大貫 恵佳

1. 対象と分析

ミシェル・フーコーには「汚辱に塗れた人々の生」(Foucault 1977→2001a=2000)という不思議な、そして人びとを惹きつけてきた論稿がある。これはそもそも、彼が関わっていた古文書研究の企画のために寄せられた序文であった。その一連の企画は、「並行する生」(“Les vies parallèles”)と名づけられ、この叢書のうちでフーコー自身の手によるものとしては、エルキュリーヌ・バルバンの手記(Foucault 1978=2003)と『家族の混乱』(Farge et Foucault 1982)が刊行されている。

「汚辱に塗れた人々の生」はこれらのシリーズ全体の序文でありながらも、それ自体ある特定の古文書をその対象として論じている。すなわち、「1660年から1760年に限られ」た「監獄や警察の文書、王への嘆願書、監禁命令封印状」である(Foucault 1977→2001a=2000: 323)。これらはフランスの旧体制下で、通常の司法的手続きを経由することなく王と民衆とのあいだで取り交されたある交渉の痕を残している。フーコーは、今となっては正当に捉えることができないある「強度」に出会い、この企画に着手しようと考えたのだという(Foucault 1977→2001a=2000: 314-5)。その最初の出会いは、次の「収監請願承認文書」を読んでいたときだとされる(Foucault 1977→2001a=2000: 314)。

マチュラン・ミラン、1707年8月31日シャラントン施療院収監——〈絶えず家族から身を隠し、林野で世に埋もれた生活を送り、夥しく訴訟を起こし、高利で金を貸しつけ資産を遣い果たし、その哀れな心を見知らぬ街路に彷徨わせつつ、より大なる事業を行い得ると自らに信じ続けるところ、この者の狂気を認む〉。(Foucault 1977→2001a=2000: 315)

また逆に、民衆から王への請願状には、たとえば「捨てられた乳母が4人の子供の名のもとにその夫の逮捕を要求する」ものがある。

4人の子供らはその父より無秩序の恐るべき範例をしか授けられませぬ。いと高き正義の御

殿、子供らをかくも恥ずべき教育からの放免を願いたてまつり、このわたくし及び我が家族をこの恥辱と不名誉からの放免を願いたてまつりまして、御社会に災い以外の何ものも成すことなきかの悪しき市民たる者に、如何なるか不正を成す事態からお解き放ちたまわらんことを。(Foucault 1977→2001a=2000: 324)

フーコーが対象とした古文書の中にはどこにでも、ここに登場する「気まぐれで無分別な高利貸し」のような、無名の何の重要性も持たない人びとの存在の痕跡がある。「正体不明の女星占い師」、「軽薄で好色な極道息子」、「言うことを聞かない若者」、「浪費癖」、「浮浪僧」……(Foucault 1977→2001a=2000)。つまりは「無名の汚辱に塗れた者たち」(Foucault 1977→2001a=2000: 323)である。フーコーはこれらの生が帯びる「汚辱」を、ジル・ド・レやマルキ・ド・サドの「贗の汚辱」(Foucault 1977→2001a=2000: 322)と対比させる。前者を特徴づけるのは「矮小さ」や「恥ずべき凡庸さ」、「とるに足らぬ」ことである。一方後者の生を特徴づけるのは、「尊敬すべき残酷さ」であり、彼らは實際上「偉大な伝説の者たち」である(Foucault 1977→2001a=2000: 322-3)。

フーコーは当初、分析の中にこれらの古文書の持つ「緊迫した強度を再構成すること」を夢見ていたらしい(Foucault 1977→2001a=2000: 316)。だが、彼は次のようにいう。「それらの強度は分析的理由づけの領域にはまったく相応しくないという危険があったのだから、そしてまた、私のディスクリブルでは、しかるべくそれらの強度を支えることが出来なかったのだから、いっそうこうした強度を、私にそれを感じさせた元の形のままにしておいたほうが良かったのではないか？」(Foucault 1977→2001a=2000: 316)そして、彼ははじめの夢想を捨て、それらのテキストを「一種の押花標本のようにして」集めることにした(Foucault 1977→2001a=2000: 315)。フーコーいわく、「私の無能が私を、引用を巡るつつましいリリズムに帰着させることになった」(Foucault 1977→2001a=2000: 317)ということだ。

そうして出来上がったこの「序文」は、私たちの前に依然として緊迫した強度を持って提示される。それはフーコーが望んでいたような「元の形のまま」の強度ではないかもしれない。なぜなら、おそらく第一には、「ミシェル・フーコー」の名前が持つ効果が働いているだろうから。第二に、この序文には「引用を巡るつつましさ」をはるかに超えて長いフーコー自身の言葉がまとわりついているから。そして最後に、このいささか冗長なフーコーの言葉自体が持つ美しさと強度によって。

それでも、私はこの強度の正体を知りたいと思う。だから、フーコーの言葉さえ「押花標本」にしたいという欲望を抑え、あえてフーコーとは逆向きに進み、分析的理由づけを試みてみようと思う。おそらく、ひとつの分析的理由づけによってこの「序文」を説明しつくすことはできないだろう。だが消極的な手法によって、つまり、できるかぎり分析を試みることによって、そ

の後に何が残るのか、それについての何らかの輪郭をみてとることは可能なのではないだろうか。

2. 支配権力と「下層」との出会い

ジル・ドゥルーズは、「汚辱に塗れた人々の生」の言葉を引用しながら、次のように述べる。フーコーは「自分自身に、次のような反論をむける。『私たちは、一線を越えること、別の側に移動することがやほりできないまま……相変わらず権力の側に、権力が言うこと、言わせることの側に選択はむけられている……』。そしておそらく彼自身こう答えるのだ。『生のもっとも強度な地点、その全エネルギーが集中する地点は、生が権力と衝突し、これと争い、権力の力を利用し、あるいはその畏を逃れようとするときである』』(Deleuze 1986=1987: 147)。この箇所は、「汚辱に塗れた人々の生」の美しさを全面的に捉えているように思われる。「権力に対する絶対的外部というものはない」(Foucault 1976=1986: 123) というテーゼどおり、フーコーはいつも権力の内側にいる。そしてまた、抵抗についても「権力に対して外側に位するものでは決してない」(Foucault 1976=1986: 123) と彼は語っていた。しかしながらそうした抵抗のあり方を明確に示すことはなかったフーコーが、はじめてそれを具体的に描いたというわけである。「それらの粒子の何ものかが私たちに届くためには……ほんの一瞬、それらを輝かせる光の束がやって来なければならなかった」(Foucault 1977→2001a=2000: 319)。「別の場所からやって来る光」つまり「権力という光との遭遇」(Foucault 1977→2001a=2000: 319)によって、それらの生は輝くことができたのである。彼/かの女らは権力の外側にいるどころか、むしろ進んで「告発し、苦情を述べ、嘆願し、「権力が介入すること」を望んだのだ」(Foucault 1977→2001a=2000: 319)。

こうした読み方が可能となる背景には、「汚辱に塗れた人々の生」の中にある、ひとつの歴史的発見がある。それまで一般に「監禁命令封印状」は、「専制君主の絶対権力」(Foucault 1977→2001a=2000: 326)の証とみなされていた。たしかに、こうした国王の命令書は、王の名のもとに民衆に対して直接に下される恣意的な処置であったともとれる。だが実際にはその大部分は、下方からの要請により発行されていた。しかも、それは貴族やブルジョワジーのみならず、広く民衆に流布した実践であった。封印状は「一種の公的サービス」であり(Foucault 1977→2001a=2000: 326)、それは民衆にとっては「近親者のうちで厄介を起こす人間を監禁してもらおうという……権利」だったのである(Foucault 1977→2001b=2000: 469)。そしてこの権利を利用するに「十分な狡知を持つ者」(Foucault 1977→2001a=2000: 327)たちは、絶対権力を「誘惑」(Foucault 1977→2001a=2000: 328)しようとして必死にもがくのである。

その結果、請願状には奇妙な「不調和」が生まれることになる。そしてその不調和にこそフーコーは魅惑されていた。すなわち「嘆き嘆願する者と彼らに対してあらゆる権力を持つ者との間の不調和。提起される問題の微細さとそこに繰り出される権力の大きさとの間の不調和……」、そしてそれらから生じる「語られていることとその語り方の不調和」(Foucault 1977→2001a=

2000: 331)。好色の者、酒飲みの若者、浪費癖といった「ちっぽけな無秩序」(Foucault 1977→2001a=2000: 327)、要するに「矮小」で恥ずべきほどに「凡庸」なこうした事件の周りに、仰々しいレトリックが並びたえられる。「……一商人たる私デュシェーヌは、畏れかしこみ申し上げる信頼とともに、厳粛なるいと高き王の御膝元に身を伏せて……嘆願致したく……」(Foucault 1977→2001a=2000: 324)、「まこと畏しこみ御殿さまに我がことを示し申し上げる自由を許されまして……」(Foucault 1977→2001a=2000: 331)といった具合に。請願状は大仰なレトリックで飾られる必要があると思われていて、独自の文法を持っていたのだった。読み書き能力のない「下層」階級の者も代書人のおかげでこのレトリックを手にした。さらにその「所定の書き方」の後には「請願とともに、その請願について『申し開きをする』文句が告訴人自身の言葉で書かれて」いる(Foucault 1977→2001b=2000: 470)。「義務的で儀式的な言語に、苛立ち、怒り、激怒、パッション、怨恨……が絡まりつく」のだ(Foucault 1977→2001a=2000: 331)。「言葉の力を動員するその様子」(Foucault 1977→2001a=2000: 324)にフーコーは「日常的なものを巡る……誇張された演劇化」(Foucault 1977→2001a=2000: 325)をみていた。まるで「安物の金ぴかの衣装をどうにかこうにか纏って、彼らを嘲笑する金持ちの観衆の前で演技をしている哀れな大道芸の一座」(Foucault 1977→2001a=2000: 332)のようだ。

だが、決定的な違いがある。そこで演じられているのは「彼ら自身の人生」であり、観衆は「彼らの人生を決定するだろう有力者たち」なのである(Foucault 1977→2001a=2000: 332)。ここでは、権力を誘惑するというただひとつの目的のために、言葉の力が利用される。その人生をかけた闘いに、支配権力もまた「整った表現で応答する」(Foucault 1977→2001a=2000: 324)。「要求が語る不品行や暴飲、暴力や放蕩が十分に監禁に値するものであるのかどうか……が判定されねばならなかった」(Foucault 1977→2001a=2000: 327)。そして要求の正当性が認められた場合には、監禁命令封印状が発行されたのである。

「汚辱」の閃光を形成しているのは、こうした「人の笑いをさそう」(Foucault 1977→2001a=2000: 324)不調和にはかならない。フーコーは、それを嘲り笑いながら、そのコミカルさに圧倒的に魅了されていたのだった。

3. 不調和が消え去る日？

しかし、厄介者を拘禁してもらう権利は、フランス革命によって奪い取られた。したがって革命期においては「各家庭が、自分たちにとって迷惑な人間を合法的に監禁してもらえるように、何らかの手だてを見つけなければなるまい」(Foucault 1977→2001b=2000: 470)という問題が提起され続けることになった。フーコーは、その結果として一連の拘禁施設が開設されたと考えていた。この発想は『狂気の歴史』(Foucault 1972=1975)とも関わりを持つものではあるが、とりわけ『監獄の誕生』(Foucault 1975=1977)との関係において重要である。周知のとおり、

フーコーは権力の作用としての個別化にこだわっていた。『監獄の誕生』においては、犯罪行為とその主体だけではなく、「犯罪者の自分の犯罪への類縁関係」(Foucault 1975=1977: 250)の観点から問われるひとりの個人の問題が描かれている。犯罪者の持つどのような傾向、性格、衝動が、犯罪行為を生み出したのか。だらしのない生活態度や働かない姿勢が犯罪行為につながった可能性がないか。どのような病理を持っているか。その者は今後矯正される可能性があるのか。こうしたすべてが裁判には不可欠の問いとなり、また、監獄にとっても事情は同じであった。監獄は、ひとりひとりを「よく見てあげる」ことによって矯正させるのだ。

「監獄が可能な刑罰の最良の方法であるはずだ、と考えることを可能にした、思考の形式と合理性のシステムを研究」(Foucault 1982→2001=2001: 184)するためには、制度としての「監獄」の歴史にとどまっているわけにはいかなかった。そしてフーコーは、この種のテクノロジーの「最初の用具」(Foucault 1977→2001a=2000: 326)を封印状の時代に見出したのである。それはたとえば家族の中に存在する「情念のゲーム」(Foucault 1982→2001=2001: 184)であるという。「ささいな逸脱や無秩序からなる微細な世界を踏破し、それを日常のディスクールの中に置き、世界を「格子目状」に警備する(Foucault 1977→2001a=2000: 326)ことは、本来司法の役割ではない。監獄を司法の支配下に置き、司法の発明であるかのように考える従来の思考を批判し、その先へ進もうとするフーコーにとって、司法の外部で徐々に何が起こっていたのかを見極めることは重大な課題であった。こうした歴史的経緯を明らかにしたフーコーは、司法や監獄にありきたりの批判を繰り返すのではなく、社会の下方からあふれてくる情念に支配権力というものがありかかっている有様、それらの情念を利用することなくしては支配権力が機能しないことを見抜いたのだ。

だがそれら情念の力は、支配権力に利用される中でだんだんと整備されていくことになる。このことはフーコーにとっては耐え難いことであった。それは、「汚辱」の「不調和」が「消え去る」過程のように思われたからだ(Foucault 1977→2001a=2000: 332)。彼はいう。「司法、警察、医学、精神科学といった多様な制度が絡まり合いい、「平凡なものは、行政、ジャーナリズム、科学の効率的だが灰色の格子によって分析されることになり、「彩りきらめく言葉は、それらの格子から少しばかり離れたところにある文学の中に探しに行くほかないだろう」と(Foucault 1977→2001a=2000: 332)。なぜならこの不調和は、「悲惨なる者たちの身体とその喧騒」が「ほとんど直接的に、王の身体と儀礼性に直面していた」ことに由来すると彼は考えていたからだ(Foucault 1977→2001a=2000: 332)。要するに、権力の眼が届かないはずであった「無秩序」の世界に住む「汚辱に塗れた人々」の権力とのはじめての出会いが演劇性を帯びるためには、王の身体性と儀礼性が人びとに対して現前していることが不可欠であると感じていたのだ。そしてそれ以降のフーコーは、自身の権力理論を展開する中で、これらの不調和なざわめきに焦点を置くことはなくなっていくのである。

だが、この不調和なざわめきそのものに真正面から向き合ってみることはできないのだろうか。この不調和は、まぎれもなく「言葉」の中にある。その背後に「情念のゲーム」や「下層」の人のびとのつたなさを感じることはできるが、フーコーが「押花標本」のようにしたいと願ったのは単なる「言葉たち」であって、その背後にあるものではない。そしてまた、王を実際に動かし厄介者を監禁するという成果をもたらしたのも、この言葉たちの力でしかないのだ。

本稿のはじめに、私はこの論稿がいささか消極的なものとなるといったが、今ここで、分析しきれぬものの輪郭がぼんやりと浮かび上がってはこないだろうか。権力の諸装置についての歴史的な分析からは絶えず逃れてしまうもの、それにもかかわらず歴史的に実在し、効力を持った「言葉」の力である。ここで私は、どうしてもフーコーの示したひとつの概念を想起せずにはいられない。決して積極的に定義されることのなかった「言表 (énoncé)」という概念である。それは、『知の考古学』(Foucault 1969=1981)以降、主題化されることこそなかったが、フーコーの著作を貫いた概念であり、その中でしっかりと機能した概念であった。その定義の不明瞭さこそ、(フーコーの「無能」さなどではなく)「言表」の性質を捉えていたのではないだろうか。それは定義から理解されるものであるというよりもむしろ、言表との出会いによって理解されるものだ。「汚辱」の言葉たちの強度にこの「言表との出会い」を見出すことはできないだろうか。

4. 言表の力

フーコーによれば、「言表」とは「言説の原子」(Foucault 1969=1981: 121)である。その単位は「論理学者たちが命題という用語で示した単位、文法学者たちが文として特徴づけた単位、あるいはさらに、『^{フナリネスト}言語分析派の人たち』が〈^{スピーチ・アクト}言語行為〉の名のもとに見定めようと試みた単位、などと同一」ではない(Foucault 1969=1981: 121)。しかしそれらすべての水準に言表は存在する。というよりも言語が「存在する」ということ自体が言表を特徴づけるのだ。「これらさまざまに異なった統一性〔文や命題、言語行為〕に関して垂直的に働く一つの機能」(Foucault 1969=1981: 131,〔 〕内は引用者による補足)として、この言表の存在がある。言表は、言語があるところにならどこにでも存在してしまうため、定義するにはあまりに普遍的であり、一方、それが「存在する」という次元は把握するにはあまりにも儂いため、定義づけを逃れてしまうのだ。

理念的には言語や言語の痕跡があるところにならどこにでも「言表」は存在する。だが、この消極的にしか定義されない言表としての強度が、命題や文や言語行為という枠を越えて、じかに響いてくる言葉たちというものがある。正確に言えば、言葉がそのようにして立ち現れてくる場面がある。「汚辱に塗れた人々」の言葉との出会いはそうした貴重な場面を構成する。

王への嘆願状に認められる言葉においては、文法学者たちが問題とする主語－述語の図式やその図式を前提としたいかなる解釈も問題とはならない。この場合、文法的構造は、言表の存在に

対して外的な条件でしかない。仮に文法的な誤りが存在したとしても、それは汚辱の生の息づかいを伝える脇役でしかないのだ。そしてまた、言表は命題構造とも同一ではない。汚辱に塗れた言葉たちは、その言葉の諸要素の定義（可能性）については頓着せず、したがって真偽の判定とも関係を持たない。その言葉が見定めているのはただ一点、いかに権力を誘惑するかということである。そのためには、現状にも自らの信念にも背いていいのだ。つまり嘘をついてもいいのである。だが、それは現実存在する必要があるし、現実的に効果を及ぼさなければならない。それならば、それは行為としての言語、すなわち言語行為と同一なのだろうか。たしかに、「明確な表現それ自身によって、その現出のうちで、つまり約束、命令……などにおいて、実現された作用である」点において、そしてそれらが「言表があったという事実そのものから生じたものである」点において、言語行為として扱われる領野は「言表」と非常に近い（Foucault 1969=1981: 125）。しかしながら、言語行為が「繰り返されることのない一つの出来事」（Foucault 1969=1981: 155）である一方、言表はある固有の意味で「反復可能な物質性」（Foucault 1969=1981: 155）を持つのである。この物質性とは時空間的なものではない。一冊の本は重版を重ねる中で、その紙、インクなどを変化させるが、それによって「言表の同一性」が「変質」するわけではない（Foucault 1969=1981: 156）。しかし、「文学史家たちにとって、著者の監督のもとに刊行された或る書物の版は、死後の諸版と同一の規約を有しない」（Foucault 1969=1981: 156）ように、言表は「制度の秩序」（Foucault 1969=1981: 157）という「物質性」に支配されるのである。それは「汚辱に塗れた人々」の嘆願書が、王や警察署長にとっては同一の言表であったのに対し、それと再び出会うことになったフーコーと私たちにとってはまったく違う言表として立ち現れることに等しい。

そして最後に、言表の主体は作者とは同一視されない。言表の統一性の原理を語る主体の位置に還元することはできないのだ。しかし一方で、言表が存在しうるのは、そこから「主体の位置が指示される限りにおいて」でしかない（Foucault 1969=1981: 145）。汚辱の言葉たちには、とりわけこの印象が強い。支配権力の気を惹くために、どこに起源を持つのか分からない言葉が織り交ぜられる。「御社会に災い以外の何ものも成すことなきかの悪しき市民たる者に……」と夫を訴える者。「社会」や「市民」は発話の主体にとってそんなに重要なのか（おそらくそうではないだろう）。そして、「仰々しい行政用語の途中で」突然さしはさまれる『「こいつめは最低の尻軽女でありまして……」などという文句』（Foucault 1977→2001b=2000: 470）。また、とりわけ書き出しに見られるおおげさな言い回し。「王やお偉い人々に宛てて書かれるならこうあるべきだと」思われ（Foucault 1977→2001a=2000: 331）、代書人によって普及したと思われる例の書き方である。さらにこれらの嘆願書自体、大部分が署名すらできない市民に代わって代書人によって書かれたものである。「作者」は代書人であるともいえるのだ。しかし、それにもかかわらず、こうした諸々の声のざわめきから、私たちにははっきりと言表の主体の位置が見えてく

る。悩み苦しみ、何とかして現状を打破しようと、お上を惹きつけようとする人びとの姿。無名のざわめきはむしろ、そうした人びとが存在したのだということを私たちに強く印象づける。

そうであるとしたら、汚辱とはいったい何なのか。それは、下層の「人びと」でも、取るに足らない「悪」でもなく、ただ「言表」に固有の「不調和」にあるのではないのか。「汚辱に塗れた人々の生」を決定づけるのはこの言表でしかないのだから。

したがってフーコーに逆らって、次のようにいうことができよう。「不調和」は王の身体性に由来するのではなく、儀礼性に由来するのではない。監獄制度の整備とその社会体への浸透によって「無秩序」が消え、そしてまた「王の身体性」や「儀礼性」が消え去るとしても、無名のざわめきは生じ続けるであろう。そもそもアルレット・ファルジュがいうように、封印状の時代において、公的なものと私的なものは同一視されていたのだ (Foucault 1982→2001=2001: 185)。無秩序は私的なものの中にあるのではなく、言表の中にある。言表は、それがどこから生じようと、「無秩序」、「混乱」、「汚辱性」を持つ。ドゥルーズはいう。「フーコーは、言表の演劇、あるいは言表可能なものの彫刻を好む。『文書』(documents)ではなく、『記念碑』(monuments)を好むのだ」(Deleuze 1986=1987: 88)。「汚辱に塗れた人々の生」にもまた「演劇」、「記念碑」という言葉が登場するのは偶然ではないだろう (Foucault 1977→2001a=2000: 325-6/ 320)。

言表の水準は、司法や監獄の制度化の内側から湧き出る。その言葉たちが強度を持って私たちの前に鮮明に立ち現れてくることももちろんあるだろう。ときには支配権力に媚を売り、政治的な正当さを欠き、私利私欲に塗れ、すぐさま支配権力にいいように利用され(そしてまた新たな制度が誕生し)、しかし一方で、あまりにも現実離れしたほどに左翼的なものであったりとしながら。そして、そうした言葉の「演劇」はおそらく今も社会のどこかで絶えず起こっていると思わずにはいられない。

文献

- Deleuze, G., 1986, *Foucault*, Minuit. (=1987, 宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社.)
- Farge, A. et M. Foucault, 1982, *Le désordre des familles*, Gallimard.
- Foucault, M., 1969, *L'archéologie du savoir*, Gallimard. (=1981, 中村雄二郎訳『知の考古学』河出書房新社.)
- Foucault, M., 1972, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard. (=1975, 田村俣訳『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社.)
- Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard. (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)
- Foucault, M., 1976, *Histoire de la sexualité volume I: La volonté de savoir*, Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I——知への意志』新潮社.)
- Foucault, M., 1977→2001a, "La vie des hommes infâmes," *Dits et écrits II: 1976-1988*, Gallimard, 237-53. (=2000, 丹生谷貴志訳「汚辱に塗れた人々の生」『ミシェル・フーコー思考集成VI——セクシュアリティ/真理』筑摩書房, 314-37.)
- Foucault, M., 1977→2001b, "Enfermement, psychiatrie, prison," *Dits et écrits II: 1976-1988*, Gallimard, 332-60.

(=2000, 阿部崇訳「監禁、精神医学、監獄」『ミシェル・フーコー思考集成VI——セクシュアリティ／真理』筑摩書房, 459-99.)

Foucault, M., 1978, *Herculine Barbin dit Alexina B.*, Gallimard. (=2003, 大杉重男訳「エルキュリーヌ・バルバン、通称アレクシナ・B」『重力』作品社, 02: 204-87.)

Foucault, M., 1982→2001, “L’âge d’or de la lettre de cachet,” *Dits et écrits II: 1976-1988*, Gallimard, 1170-1. (=2001, 佐藤嘉幸訳「封印令状の黄金時代」『ミシェル・フーコー思考集成IX——自己／統治性／快楽』筑摩書房, 183-5.)